

飼育下テングザルにおける味覚センサを用いた給与樹葉の嗜好性調査

川崎立太¹, 池崎恵子², 山田杏²

¹ よこはま動物園, ² 株式会社インテリジェントセンサーテクノロジー

テングザル (*Nasalis larvatus*) は前胃発酵して栄養を吸収する葉食性の霊長類である。よこはま動物園では、生息域外保全の目的で2009年より飼育繁殖を試みているが、その特殊な栄養生理から飼育管理が難しい。その一方で、生息地と気候帯の似通った東南アジアにおける飼育管理では、餌となる樹葉を容易に入手できることなどから長期飼育を可能にしている。

近年動物園では、栄養学の目覚ましい進歩や、飼育動物のエンリッチメント効果を高める目的で給餌内容をより野生下のものに近づける傾向にある。テングザルはさらに、新芽・若葉を選択して食べるブラウザーであることが野生下での研究で明らかになっている。温帯性気候の日本で新芽・若葉を自然界から入手できる時期は限られる。ただし、ブラウザーであっても、新芽・若葉以外の可食樹葉は存在するが数種に限られる。動物を飼育管理する上では、年間を通して供給できる飼料を確保することが最重要課題だ。それゆえ、野生動物が採食する際の嗜好性やその要因の解明は欠かせない。

採食行動を観察する限り、テングザルは与えられた樹葉に対して、最終的に味見をした上で可食樹葉を決めているものと推察される。本研究では、味覚に作用する化学物質を便宜的に人間の感覚である基本五味（甘味、旨味、塩味、酸味、苦味と渋味）などの観点から検討することとし、人間用に開発された味覚センサを用いてテングザルの嗜好傾向を調べた。